



進修同窓会 HP にアクセス

第179号 2024 (令和6) 年6月18日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

筑波登山

開校当初、筑波登山は修学旅行のコースに組み入れられていたが、1901 [明治34] 年の1年生のそれを最後に、筑波山方面はコースではなくなりました。その後は、5年生の修学旅行の期間中に、1～4年生が日帰りで筑波登山を行うようになります。今号では、その様子を描いていきます。

引用文中の旧字体は、人名を除いて、新字体に改めました。

なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。



筑波山登山 (大正2年春)

筑波登山

1902 年以降は、1907 [明治40] 年の4・5年生の修学旅行中に、3年生以下の小田までの遠足と希望者は更に足を伸ばした筑波登山とが行われ、1912 [明治45] 年、1913 [大正2] 年、1914 年には、春に、日帰りの全校筑波登山が実施されました。1915 年には、5年生の箱根への修学旅行中に、4年生以下が筑波登山を行い、1916 年には、4・5年生合同の関西修学旅行中に、3年生以下が筑波嶺に挑んでいました。1912 年に入学した中西秀男 (中17回) は、この山行を次のように記しています。『……毎年かならずやる行事の一つに春の筑波登山があった。午前六時に学校に集合して、四列側面縦隊で筑波街道を行進し、筑波神社へ参拝するとすぐ登山にかかる。同時に行列はくずれて早い者がちに登り出し、男体・女体をめぐってバラバラに土浦まで帰ってくる。足弱の下級生などは日が暮れてからたどり着いたものだ。大骨折って二十何キロ【片道の意。登山を含めると往復五十キロ程の距離になる】だか歩くわけだが、学校の行事にはいつも鍛錬という含みがあることを誰も承知していた。……』(創立百周年記念誌『進修百年』1997 [平成9] 年11月刊)

1917 年には、1年生の筑波登山と2年生以上の東京での極東選手権競技大会 (極東五輪) の見学とが行われ、1918 年には、4・5年生合同の関西修学旅行中に、3年生以下は日帰りで東京に出向きました。1919・1920 年には、全学年での筑波登山が行われ、1921 [大正10] 年以降には、5年生の関西修学旅行中に、4年生以下での筑波登山を再び実施するようになりました。

1926 [大正15] 年には、5月9日に霞ヶ浦でボートレースが開催され、15日からは5年生が関西修学旅行に出掛けました (22日まで)。5年生が出発した日に、4年生以下での筑波登山が実施され、3年神谷暉 (中28回) は、1927 [昭和2] 年1月発行の『進修第25号』に「筑波登山記」と題して、その様子を述べています。



筑波山鉄道の列車 (昭和初期)

「前には本邦第二の湖、霞ヶ浦も控へ後には関東の名山筑波山を背負つて居る我が中学校の生徒は外【ほか】の山にも海にも面しない中学校の生徒にくらべて非常に幸福である。であるから湖にはボートレース。山は遠足と年中行事になつて居る。今年は一トレースのあつてから一週間も立たないで筑波登山が催された。人数【参加者】は一年から四年迄と五年の関西旅行をしない者である。わらち、きやはん、と云ふいでたちで六時半、学校を出発した。筑波山は関東の名山と云つても高さ八百七十米位の山であるから登る事はしれたものである。僕等は学校から一歩ふみ出したもので六里の道を歩いて行き、それからやつこら／＼登るのである。だからやや／＼減【好い加減・いいかげん】くたびれる。それにひきかへて【筑波鉄道の】汽車通学の者や其の方面の人々は僕等の到着を待つて居るのだから元氣のある事おびたしい。山麓迄は平凡な田舎道で何の面白味もない。ぼつ／＼ある道すぢの村はまだ早いので村人は家の前にずらりとならんで我等を見送つて居る。かうした時ばかりは元氣よく行くけれど二里も歩く中にもうくたびれて参つてしまふ。

筑波山の前の小山小田山をぐるりと廻る頃からは目的の山が見えて少しは元氣になる。ここいらは土地が高いせいか田の間に四五本の木があり中に小さな池がある。筑波鉄道は始終道に沿うて居て小田を過ぎた頃カン／＼カラ／＼マツチ箱が走つて来る。帰りには此の汽車に乗つて来るのだけれど。神郡に達した。神郡口からは石段が長く続いて随分困難だ。石段ばかりこの様にあつてはやりきれない。山腹の【筑波神社の】社殿に達する。それまでの道の両側には料理屋宿屋がぎ／＼とありある。社殿の前には御土産物店が沢山ならんで居る。一通り参拝をすませていよく登り始める。脇に1925 年10月に営業を開始した【ケブルカー】の終点がある。山はすつかり荒されて居る。大昔から和歌に歌はれた霊山も今は文明の利器の為に侵されてむごたらしく山骨をあらはして居る。しかしながらこのケブルカーの出来た為女、子供にも登山が非常に容易くなり、東京方面、相生【桐生の誤植か】方面からも一層登山者が多くなつた。僕は男体山に登り、途中で昼飯をとつた。こもり茂つた山の遠く鳴く鳥のこだまに響く音を聞きながら岩に腰かけ飯を食ふのは何とも云はれぬよい気持である。いよく登る。しかし一町登らぬ中にくたびれてへこたれる。こんな筈ではなかつたが、と云つても間にあはぬ。う／＼くた／＼つた途中の茶屋。はうやう／＼して腰かける。腰かけながら考へる。『何と云ふふざまだらうこれくらい。』の山にへこたれるなんてしかし仕方がない。やつと頂上に登つた。男体女体両山の間の平かな所には大きな飲食店が二軒あり、茶屋が一軒ある。ケブルカーの建物もあつて一寸よい所である。男体山に登り始める。もう友達は大部分上つて帰り道であつた。頂上に登る頃は北の方から密雲がおりしよせて寒い風がびゅう／＼吹く。岩の上にあたつて南の方を眺める。一眸千里。すぐ目の下には先に通つて来た道

が白く蛇の様にうねり、小田山が芋虫の様に横はる。遙かに土浦を見れば霞ヶ浦は水たまりの様に土浦町はこんもりした一部落にすぎない。右手には小貝川が流れて東京方面は余り遠くて霞んで居る。

そんな事をして居る中に雲はどん／＼おしよせて風は益々寒くなる。とう／＼雨さへ加はつた。僕はかける様にして下りた。少し休んで女体山に登る。霧が頭上をかすめる。岩の間をぬふ様にして登る。雲いよくおしよせて山をすつかり包んでしまった。下を見れば真白きものの外何も見えぬ。僕等は急いで下りたが一寸の間で霧ははれた。

これから女体山を下りるのがだが寒くたびれて居るので僕は止めに於てケーブルカーで降りる事にした。

ケーブルカーは丁度井戸のつるべのやうで途中で交叉する【交換する】のである。車体は階段式で新しく気持がよく、僅か十分間で降りた。途中のトンネルに入る中は全く穴へ入る様でぶつつかる様である。車から降りると全く足はだるくなつて歩く力がなくなつてしまった。

筑波旅館に居る先生の所へ名残をつけて停車場に來た。停車場には土浦以外の中学校と女学校の生徒も来て居た。三時半には先に【マツチ箱】と悪口云つた汽車に乗つてゆられ／＼帰つて來た。くたびれるけれど筑波登山は愉快である。(をばり)

学校から藤沢、小田、北条を経て神郡までは、全学年一緒に歩き、神郡で出欠を取つて、解散となり、友達同士4、5人のグループで石段を登り始めます。筑波山神社に参詣後、いよいよ山中に入りますが、ここで生徒たちは決断を迫られます。

「……この時友達の間で議論が起つた。それは歩いて登ると云ふ硬派とケーブルカーだと云ふ軟派である。私は軟派説の一人である。そして宮脇のステーションよりケーブルカーに依つて一気に山頂に上らうとした。然しあちらに二人こちらに二人三三五五として石に紛れて登つて行く実に男らしい姿を胸に描いて軟説を後悔したが仕方がない。やがて

宮脇ステーションを出発した。さすがの急勾配には驚嘆の外はなかつた。窓外に顔を出して見ると一本のロップが引上げで居るのだなと云ふことに気がついた。このロップがきれたらどうなるんだなどつまらぬことに心を惹かされた。我にかへつて見ると山頂の停車場に

ついた。……(『進修第25号』(筑波登山三甲 菊地由三郎・中28回))



筑波山ケーブルカー (大正期)

「……筑波神社のほとりで愉快に弁当をつかひ了つた我等一五人は此処で臨時会議を開いた。といふと驚くであらうがそれは要するにケーブルカーに搭ずるといふことにあつた。暫く議区々【くまちまち】であつたが、結局徒歩連の硬説が勝を占め、一行は愈々秀峰の頂を踏破すべくその第一歩に踏み入れた。……(『進修第25号』(筑波登山記三甲 岡野富士雄)と硬派説堅持のグループもあります。しかし、

「……谷川の流れのコロ／＼と云ふ音にはげまされて登り行けば、ケーブルカーを眼下に眺められる風光のよい処がある。そこで一休して居ればケーブルカーが登つて來た、中学生で中は満員だ、やがてから／＼と音を長引かせて消えさつた。下りは運転手だけだつた。……」

(1928年8月発行『進修第28号』(筑波山二乙 矢口正男))

とあるように、軟派説を採る土中生も多かったようです。ただ、これは1年生の黒木榮が、

「……少々元氣も回復したのでK君を残して停車場の内に入つて時計を見た、時に十二時三十分『こりや大変だ。』頂上まで歩くかうと思つてゐた僕も、いくら最大急行を出したつて、午後三時迄には帰れつこない。切符を買つてゐる友達に『幾らだ』とたづねると『四十五銭』だといふ、電車賃の高いのに二度びつくり、切符売場の上には電車賃を書いたものが額に入つてそれと並んで『次の発車十二時三十五分』と大きく書いて張つてある。……(『進修第28号』(筑波に登る)と書いていふように、集合時刻が決めておられ、45銭という高い運賃ながら、やむを得ず乗車していたようです。下山すると、まず、筑波の旅館で待機している先生方に到着を報告し、筑波鉄道の筑波駅から汽車で帰路に就きました。

筑波行軍

昭和に入り、「満蒙の危機」(注)が叫ばれるようになると、筑波登山には軍事教練の意味合いが強くなつてきました。保立俊一(中31回)は、その様子を

「昭和二年土中(現土浦一高)に入学した。土中の春の遠足は一年生から四年生まで毎年筑波山まで歩くことであつた。朝六時に真鍋台の学校を出発する。ゲートルを巻き弁当と水筒をぶら下げただけの姿で行進が始まる。四年生の吹く行進ラッパで一年生を先頭に元氣よく行進した。ラッパに合わせて砂利道をふむ靴の音がきれいにそろつて樂に行進することが出来た。……(『水郷つちうら回想』(筑波線廃止)と記しています。

また、1年鈴木貞之助(中34回)は、「筑波山へ行軍して(1930年9月発行『進修第32号』)と題して、その苦勞を綴つています。『我が土中の筑波行軍。まことにまつてみた筑波行軍は今日(1930年6月6日)なのだ。……六時我々土中生は元氣と嬉しさ

に胸をおどらせながら、学校をあとに筑波に向つた。正門より真直に進んでどん／＼と行軍した。……藤沢に來た。此処で『十分休憩』といふ。……

北条の町の中を通つて右に折れ、田井といふ小学校に着いた。此処で弁当をたべ、それからいよく登り始めるのだ。筑波山は前よりは大きく眼前にある。一時間休憩の後、集合のラッパがなつた。皆は余程くたびれてゐると見えて、学校で教練の時のやうに迅速に集合の出来は、一人もなかつた。整列して渥美【友義】先生【少佐・配属将校】のいろ／＼登山についての注意をきいてから、二列縦隊で登りはじめた。……白井といふ所で解散になりめい／＼そこから登り始めてよくことになつた。……それ【男体山】から女体山に向つて、大急ぎで女体山本社に登つた。大黒石や出船入船や高天原など、それ／＼名勝を見て、降り口に着いた。先生の所に無事に歸つたことを知らせ、弁慶七尻岩や雷神の窟等の奇岩に驚嘆しつゝ停車場に向つた。停車場に來て見ると皆はさ／＼くたびれたやうに、ぐつたりと腰をおろして汽車の來るのをまつてゐた。午後四時半発の汽車は我が六百の小勇士をのせて、筑波を後にはしりだした。」

山頂までの距離は長く、ケーブルカーの利用が禁止されたため、低学年のうちにはかなり辛いものであつたようです。が、上級学年になると、余裕も出て、楽しい行事の一つとなつていました。しかし、この筑波登山も、1941(昭和16)年6月に実施された1年生のが最後となり、修学旅行も、1942年の聖地(伊勢・京都・奈良)巡拝旅行が最終となりました。

(注)「満蒙の危機」

日本が1904年の日露戦争以来獲得してきた、満蒙(現在の中国東北地方・内モンゴル)の權益は、1920年代後半には失われ始めた。この事態が日本国内では「満蒙の危機」と喧伝され、軍部はその打開策として、やがて、満州事変、満州国建国を引き起こした。